

# 繊維と共に60年の回顧 (1)

## 研究から開発、生産、営業、貿易、企画調査

### 第1章 繊維と共に60年

八十路を迎えて人生を振り返ってみると、その3/4の60年間は繊維の世界に浸っていたことになる。昭和27年春 京都工芸繊維大学 色染工芸学科に入学して2年目の昭和28年(1953年)の2回生になると早速、専門科目の講義が始まり、ここで初めて、番手やデニールなどの専門語に出会った。以来60年間、この分野でお世話になったことになる。60年という年月は人生では還暦を迎えたことになり、感無量である。お陰様で多彩な経験と悲喜こもごも様々な出会いがあり、この貴重な経験は語るに値するのではと思う。

人生経験の様子は人それぞれであり、その路一筋、徹底したプロの道を歩まれる方は素晴らしく尊敬に値する。一方、私の場合は多様な経験というか、繊維に関してはなんでも屋みたいなものであった。すなわち、体験した素材は粗原料から糸綿・テキスタイル・アパレルまで商品形態・用途などは様々であり、また仕事の形態も、研究開発から、生産技術、営業、貿易、企画調査とわたり、経理以外は殆ど身をもって体験した。あいつの専門は何かとささやかれ、なんでも屋といわれるのは多少軽く見下げられた気分にもなる。仕事の場所も研究室の薄暗い部屋から、騒音が奏でる生産工場、静寂な資料室、顧客と交渉の白熱したオフィス、東西奔走した飛行機や列車出張など、色とりどりである。

特に海外での仕事はアジアと欧米などを含めて習慣や文化の異なる65ヶ国でのビジネス折衝を経験し、国際会議や技術・営業の折衝など異文化の中で多彩な体験は貴重なものであった。

繊維に始まる私の人生は、箒の音で夜があけるテキスタイルの町・福井がスタートであった。親がシルクのトレーダーであったので、物心つく頃から、繊維の雰囲気浸かっていた。戦後の繊維産業が復興した日本で、親の勧めもあって京都工芸繊維大学に進学したのが1952年(昭和27年)であった。専攻したのが染色化学であった。アセテート繊維の分散染料による染色というのが卒論であった。ご指導を受けたのは当時の小西行雄教授で、漂々とした風格が威厳を醸し出していた。その頃京大から客員講師として、ビニロンの発明として有名な桜田一郎先生の高分子化学の講義を拝聴したのは印象に残っている。丁度その頃、英国のICIがポリエステル繊維テリレンを開発し、DuPontがダクロンを上市したところで、American Dyestuff Reporter誌のポリエステル繊維の分散染料による染色の文献に驚愕しながら拝読したのを思い出される。繊維の世界は新しい技術が矢継ぎ早に現れ、毎日が暁の興奮さめやまぬ時代であった。さらに、当時の繊維産業は戦後の日本の復興の牽引的役割を担い、その最先端の技術を身近に体験する活性に恵まれた時代でもあった。

#### 一 最初の就職

1956年(昭和31年)卒論も無事通り、卒業することが出来た。当時、父親が福井で繊維の商売に携わっていた関係上、当時の福井精練(現 セーレン)に就職した。当時

の福井精練は日本でも有数の大手100%委託染色加工の企業であった。旭化成のベンベルグデシンの加工で著名であった。“AK3500”というときは一世を風靡したクレープデシン組織の裏地であった。ベンベルグ織物の寸法安定性を与えるための樹脂加工の技術開発が私に与えられた最初の仕事であった。尿素とホルマリンにメラミンなどの第3成分を混ぜて、寸法安定性と耐皺性を向上させながら強力を維持する処方箋を探し出す課題であった。この間、技術問題の打ち合わせで、旭化成の高槻繊維加工研究所や大阪本社に頻繁に通い、技術の練磨とテキスタイルビジネスの習得が若い技術者にとっては貴重な経験であった。この仕事を6年間務めさせていただき、1963年（昭和38年）に、東レに転職した。より活力のある環境を求めて当時繊維の高次加工の強化を指向していた東レでは新しい環境に恵まれていたが、終身雇用の習慣の強い当時の社会通念から見ればかなり思い切った転身であった。これが幸いしたかどうか、私の人生は多彩な展開となり、この中で様々な人生記録が出来上がっていった。これらはすべて繊維につながった経験となりこの中からいろいろなエピソードが生まれた。その一部をこれから紹介したい。

## 第2章 東レでの研究開発生活

滋賀県大津市の南部の景勝地・園山に新設された東レの研究開発の拠点がある。新しく開発された合成繊維の紡編織染技術などの高次加工技術の開発を進めるための殿堂がもうけられた。ここの一部に染色研究所があり、200名以上のスタッフが新しいナイロンやポリエステル（テトロン）アクリル（トレロン）などの染色加工の新しい技術の開発が行われた。今では常識と思われるいろいろな技術は、当時一つ一つが新鮮な新事実であり毎日が興奮の坩堝であった。

東レの研究開発時代は海外勤務の出入りを挟んで述べ6年間勤務になった。従って本格的筋の通った研究生活ではないが、当時の我が国の最先端に行く染色加工技術開発の片鱗に触れたものである。研究開発時代はいろいろなテーマを取り組んだが、化合繊維メーカーの研究開発として、新素材の開発を三島や愛知のポリエステル、ナイロン繊維の研究室の研究スタッフと協力して新素材の研究開発を取り組んだ。

この頃、スタンダードな合繊の開発は一巡し、特殊タイプの開発段階に入り、複合繊維や易可染性繊維、難燃繊維などの特殊機能繊維の染色加工技術の開発を担当した。複合繊維は芯鞘型、バイメタル型、海島型などの染色加工などであった。当時は新繊維を従来の染色技術で行う事から始めたので、繊維の細かい複合繊維はどうしても色の深みが出ず苦労したものであった。バイメタル型のポリエステル複合繊維は熱処理で捲縮が発生するので、織物の横糸に挿入すると熱処理で発生し、独特のしぼが発生し、仮よりを行わないまま糸のままでクレープデシン様のしぼ織物になることが当時は興味深い新製品になるので、これの開発に熱中した。かなりいいものが出来たが、やはり撚糸で作ったトルク糸のしぼ効果にはどうしても勝てず商業化の軌道には乗れなかった。数年後に人工皮革“エクセヌ”で脚光を浴びた海島型の複合繊維は当時としては画期的なアイデアの新素材であったが、発想に乏しい当時の我々研究陣にはなかなかその特性を活かすブレスルーが見いだせないまま時間が過ぎていった。繊維が極端に細いことが従来の概念では染めの発色性に乏しいとか、繊維の弾性、反発力に乏しいとする、従来の固定概念にこだわった評価が災いしたものである。新製品の開発は既成概念に縛られない新しい発想からのアプローチが肝要であることが教えられた。

### 第3章 オーストラリア駐在で海外ビジネス初体験

東レ転職後1年目の昭和38年12月オーストラリアのシドニー駐在員を拝命した。当時、若年30歳での海外勤務は自分ながら驚いたものだった。当時の東レ（当時は東洋レーヨン）は海外進出の黎明期であり、先ず東南アジアからという事で昭和38年にバンコクにポリエステル/レーヨン混紡織物の紡績、織布、染色加工一貫工場の生産でスタートした。ポリエステル/レーヨン混織物は中肉地の化合織織物では薄地系のポリエステル/綿混織物と共に人気の商品であり、当時、綿紡系の日本のメーカーが積極的に進出を始めていた。

一方、日本からの繊維素材とテキスタイル製品の輸出がその頃、急激に盛んになった。オーストラリア向けにはトリコット用のナイロン糸や現地のテキスタイルプリンター向けのポリエステルプリント下地の輸出が活況を呈した。この二つの業務でシドニー技術駐在員の仕事がお陰様で繁忙を極めた。仕事の方は適当に対応しながらオーストラリア・ニュージーランドの英語圏の生活を満喫した。 当時はまだ戦後の余韻が残っていて、日本人に対する感情も今ほど親睦的でなく、ネガティブな対日感情が残っていた。 毎年、6月にはアンザスデーと称する太平洋戦争記念日には、大きなパレードなどがあり、日本人は表に出るのを控えたものであった。

先述のトリコット用のナイロン糸のプロモーションとポリエステルプリント下地の具体的な業務に加え、役割期待として認識していたのが、東レと日本の国際的な知名度を上げるための活動である。特に具体的な業務に関わっていなくても著名な政府官庁や企業の要人との接触を通じて、日本や東レのイメージを上げる活動に力を注いだものだった。

#### 一 トリコット、仮より加工向けのナイロン糸

当時の東レの輸出競争力のある品種はナイロンフィラメント糸であった。40Dや70Dのボビン（これをパーンと称した）に巻いた糸で40Dはビームに巻いたまま輸出したが、現地で整経してビームに巻くものもあった。

東レのナイロン糸は当時の日本では最も品質優れた糸であったが、欧米の糸と伍していくにはまだ経験が少なく、多くの問題点に遭遇した。特に高速回転でのフィラメント同志の絡み合いが問題となり操業性の点が見劣りするものが難点であった。こういう問題点は先進地域で使ってもらわないと顕在化しない。非常に専門的な技術考察力が必要であり、もともと染色が専門の私には手に負えない難題であった。東レの幹部も問題点を理解し、当時の愛知工場の山本製糸課長と紡織研究所の桜川研究員を派遣された。工場はシドニーとメルボルンを中心に散在し、改良品のテストなどを含めて1ヶ月近く、工場に通い、問題解決に努めた。同時に70Dの仮より用途も製糸、仮よりの専門家からのサポートを戴いて問題解決に努めた。この時仮よりというプロセスを始めて見聞し技術の面白みと広がりを実感した。駐在員は技術を習得しながら出張者達の滞在を支援するのが仕事の役割であるの、このような興味深い仕事はない。おかげでこの役割を通じて自分にとって新しい分野の技術を学びながらオーストラリアの文化を始め、海外の生活環境を実地で体験習得できた。

#### 一 ポリエステルステープルの販促のための紡績工場通い

もう一つのまとまった仕事は、当時開発の注目のテーマの一つであった、ポリエステルステープルファイバーの綿混紡績用のプロモーションであった。 当時、シドニー郊外に

ブラッドフォード ミルズという英国風の伝統的な綿紡工場があり、三井物産の働きかけで、熱心に試験紡績に工場へ通ったものである。何しろ、当時のICIの“テリレン”がオーストラリアでは全盛を極めていたのでこのチャレンジは大変な課題であった。当時はまだ、日本に対する受け入れも大戦の影響もあって、差別的な受け取り方もあり、工場内では“ジャップ”などの蔑視的表現も聞かれ、まだ対等な舞台で仕事をさせてもらったという気分ではなかった。しかし、幹部の紳士的な対応はさすが英国の流れを感じたものであった。

### 一 オーストラリア滞在を通じての生活体験

筆者が始めてシドニーに居を構えたのは、昭和38年（1963年）であったから、終戦後まだ18年しかたっていない。戦中戦後の退廃していた当時の日本から、いきなり先進国に飛び込んだのは、その格差をあまりにも実感させられた。当時、同僚の営業担当の竹村駐在員（故人）と共同で住居を借り、手伝いさんを雇っての生活は身に余る環境であった。

市中から車で30分ほどのキヤメレーというシドニー湾を近くに眺める風光明媚な住宅街であった。近くにはゴルフ場があり、ワンラウンドが当時の日本円で800円くらいの驚くべき安さであった。出勤前にハーフラウンド、また 帰宅後、ハーフを回るという便利さであった。通勤のため自動車運転の免許を始めて現地で取得したものであった。仕事で出張はメルボルンやホバート、アデレードは飛行機で、キャンベラやブリスベーンなどの近郊の工場は自動車運転しながらの訪問であった。

オーストラリアの英語はかなり、なまりが強いものであったが、標準がどれかもわからない当時とはとにかくついて行くのがやっとならであった。



写真 左 シドニー港湾

右 シドニー 郊外の住いの前庭で

英語はなまりのある会話を使いこなす努力よりも、私はビジネスや技術資料の作成での英作文の方で正確なコミュニケーションに重点を置いて研鑽したのが、後年役に立ったように思う。それでも、時折、出張した、シンガポールでは標準の英会話が聞かれ、言葉の難易度は地方によって違うハンデイがあると思った。ビジネス用の英語の体験と見解は後編で触れてみたい。



写真 左 東レシドニー事務所・スタッフ 右 プロペラ機でメルボルンへ出張  
(右から、ジョージ (営業)、ヘレン (秘書) 竹村駐在員 (営業)、ヴァンダ (秘書)、米長 (技術))

(続く)

(色染・昭31 米長 粲)